

をたどることで上方喜劇における女優の系譜を明らかにしたいと考える私には願ってもない貴重な資料であり、早く公開できるようにしたいと考えている。

(国際日本文化研究センター特任助教)

松島詩子コレクションから見渡す戦前昭和の歌謡界

細川 周平

昭和一〇年代から二〇年代にかけて人気の女性歌手に松島詩子え(一九〇五年山口県柳井生まれ)一九九一年東京没)がいる。戦前の「タバ仄かに」「マロニエの木蔭」、戦後の「喫茶店の片隅で」「スペインの恋唄」などが懐メロ好きに愛されている。上品なたたずまいと歌い方は忠実なファンを集め、数年前、彼女のタンゴ、シャンソン、歌謡曲が一枚のCD『ラ・タンギスタ』(キング)にまとめられた。縁あってその彼女の写真約八百枚、紙資料約八〇点が日文研図書館に所蔵された。写真の中には彼女の夫君で歌手の内海一郎(「道頓堀行進曲」の創唱者)、デビュー当時の笠置シズ子(三笠静子名義)やキング歌手丸山和歌子のサイン入りブロマイド、東宝スタジオ前でチョンマゲ姿の榎本健一(エノケン)を囲む記念写真、少女歌手ミミー宮島との記念写真、など芸能史上貴重なものが含まれている。一九三九年、日華事変二周年を記念して講談社が歌詞を募集し、彼女が千早淑子名義で録音に参加した「出征兵士を送る



歌」の発表会の様子も記録されている。「興亜大建設」と大きく垂れ幕のかかった舞台で、イブニングドレスのあでやかな姿で歌っているのは、いつどこのことなのだろう。また軍人や要人と写った大陸慰問の写真や、アコーディオン奏者一人を脇に置いた野外の慰問演奏会の遠景もある。戦時限定の芸能活動、芸能人の外地経験としての慰問に興味を持つ者にはまたとない刺激となる。

昭和初頭の関西の有力レーベル、ニッソー、タイヘイ、クリスタルの舞台記録も数枚ある。なかでも目を惹くのは、トランペット、サクソ、トロンボーン、ヴァイオリン、ベース、ドラムスを含む女性だけの一二名編成のジャズバンドで、今まで活字資料では見たことがない。同時代のアメリカで類似の女性スウィン

グ・バンドが人気を得ていたのを真似たのだろう。他にもマンドリン合奏にアコーディオンを加えた編成の女性バンドの伴奏で、松島らしき歌手が歌う写真もある。背景のペナントから察して、新宿にあった帝都ダンスホールのテイト・ミス・バンドらしい。彼女らの記録もいまだ見ていない。歌手は現場に応じた伴奏形態に即応する力を求められた。マンドリン連盟関連の雑誌には、各地のアマチュア合奏団（ほぼすべて男性のみ）しか記録されておらず、このような女性の、それも興行と結びついた楽団の存在には意表を突かれた。ダンサーの余技とも想像される。

戦前のダンスホールの写真は他にもだいぶある。たとえばメリー・クリスマスと英字で飾り文字のつけられたバンドスタンドで、ギター伴奏で男性五人が歌っている写真は、関西レーベルの垂れ幕があることから、同レーベル専属と考えられる（バンドマンの余興かもしれない）。レコード会社が積極的にダンスホールを利用していたことがわかる。この時期、ギター一本の伴奏の歌の録音はわずかしかないが、実演ではもっと普及していたとも想像される（非常な数の和洋流行歌ギター譜が出版されていた）。大太鼓や木魚、グロックンジュビールが舞台上に乗っているのもおやと思わせる。着物の踊り子数名が唐傘さしてダンスフロアで踊る写真もある。天井からは花の飾りつけがぶら下げられ、壁面には松島が所属したレーベルのアーティスト名入りの提灯が飾られている。戦前、ジャズ、タンゴの実演の場として最も重要だったダンスホールを、レコード会社は見逃すはずはなく、想像以上に深く関わっていたらしい。

写真もさることながら、チラシ、プログラムが貴重だ。たとえば今回初めて新宿の帝都舞踏場（一九三一年開場）の『TEITTO』という一〇頁ほどの配布物を目にした。有力映画館が配っていた宣伝誌と似ている。松島の写真を表紙にした号（一九三五年二月）を開くと、彼女

をゲストとする唄と踊りのオトシダマ・シヨオなるものが四日間開かれることがわかる。上の唐傘のショーはこうした特別企画のひとつなのだろう。別の号（一九三四年）では松島が浅草の魅力語るエッセイの他、人気歌手天野喜久代と小林千代子、朝鮮出身の映画監督江夏太郎（許泳^{フユン}）の文章、ダンサーの理想の男性像アンケート、近くの第一劇場の少女歌劇らしいグランドレビューの広告、ダンスホール御用達の靴屋や洋装店の広告などが編集され、興味が尽きない。別のチラシによれば、帝都ホールには古賀政男と彼のティチク・マンドリン・グループ（たぶん明治大学マンドリン・クラブの変名）が出演し、ディック・ミネ、楠木繁夫、チェリー宮野（二世歌手・ダンサー）、それに松島が登場するショーも催された。ティチク時代の古賀（一九三四〜三八年）の先進性に、彼女はうまく波長が合った。調査が進めば、ムーラン・ルージュ劇場で知られる戦前新宿のモダン文化のなかで、このダンスホールを位置づけることができるだろう。

山陽から上京直後の松島は、コロムビア・レーベルの納涼大会（一九三二年、於日比谷新音楽堂）で天野喜久代、バートン・クレイン（米人ジャーナリストの歌手）、二村定一とエノケン、フランス渡りの巴里ムウラン・ルウジュ・フロリダ・バンド、柳家金語楼ら大物に混じって舞台に立っている。その前後には二村らと同レーベルの地方巡業にも加わり、美しい新人歌手としてしっかり売り出されていた。同レーベルの山田耕作に推薦されたという逸話が残っている。またスチルマン化粧品がスボンサーとなったショーでは淡谷のり子、牧野周一（漫談）、ジョージ堀（タップ）らと並んでいる（ウテナ化粧品のショーへの出演記録もある）。スチルマンの宣伝文句「さよならそばかす」と彼女のクローズアップが並んだチラシを見ると、そばかすささまさま、という邪心（？）が湧いてくる。レコード会社と企業のアピールはこの時期

の芸能界の新しい側面で、もちろん現在につながる。

彼女は大学の音楽部とも関係が深く、六大学芸術祭で明治大学マンドリン・クラブと競演し、同クラブの九州公演につきあった。古賀つながりであろう。早稲田大学ハーモニカ・ソサイエティの定演（一九三六年）で、『蝶々夫人』から「ある晴れた日」と古賀作曲の「涙の春」を歌った記録もある（その練習風景と思しき写真もある）。そのメンバーにはギター、ハワイアン・ギター、ウクレレもいて、当時いうジャズに近いサウンドを作っていただろう。同じ会には松竹少女歌劇からのゲスト歌手もいて、純粹なハーモニカ同好会の枠を越えている。六大学はスポーツだけでなく、音楽方面でもプロにつながり羽振りを利かせた。

このように彼女にとってクラシックと歌謡曲が並ぶことに違和感はなかった。上の納涼大会の数ヵ月後、フランス留学より帰国したばかりの高木東六のピアノ・トリオとともに米子、倉吉を巡業した折、シューマン、シューベルト、山田耕作らの歌曲を歌っている。山口県の高等女学校を卒業し、広島的女学校で教鞭を執った後に上京し（その女学校の音楽会ではロッシーニと近衛秀麿を歌っている）、声楽のレッスンを受けた松島にとって、ピアノ伴奏の歌曲は馴染みのはずだが、録音は残していない。当時、音楽学校で専門教育を受けた後に和洋の大衆歌謡を歌う歌手として、レコード会社と契約する例は多かったが、これだけ舞台出演の資料を残し、曲目の幅を伝えてくれた歌手は他にいない。

松島コレクシヨンはどのアイテムにもぞくぞくする。彼女についてばかりか、戦前興行界の知られてこなかった部分の貴重な証言に満ちている。あまりに断片的で、これだけから彼女の伝記を組み立てるのはむずかしいが、音楽生活の広がりを知ることが歴史的な豊かさにつながる。日文研は現在、大衆文化研究を中期プロジェクトに掲げている。広くはマンガ、アニメ、